

「弱いときにこそ強い」

コリント人への第二の手紙 12章 7節～10節

説 教 本庄侑子牧師

「私の恵みはあなたに対して十分である。私の力は弱いところに完全にあらわれる。」(コリント人への第二の手紙12章9節)パウロが聞いた神様の言葉です。キリスト教会史上、最大の貢献者と言っていい人物は、一つのとげに打たれていました。そのとげは病だったと言われていました。それが原因で、肉体的にしんどかっただけでなく、人から信頼されず、伝道の妨げになることもあったようです。

「このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようと、三度も主に祈った。」(8節)「三度」というのは本当に真剣に祈り願ったということです。それは信仰的な動機でした。このとげさえなければ人に信頼されて、もっと神様のことを伝えられる、と。しかし、とげは取られませんでした。パウロは思い通りにならない体を抱えたまま、伝道に不利な条件を背負いながら、歩みを続けることになりました。

私達も神様にお仕えしたい、という信仰の祈りがあります。しかし、その祈りが真剣であればあるほど、それを思うようにできない弱さが与えられた時、とげが疎ましくなります。肉体の病、心の病。日々老いていく自分の体。家族。これさえなければもっと神様のために働けるのに、と。ことに、献堂100周年、創立150周年を控えている日々、信仰の先達たちの姿を思い起こしては、自分を責めたくくなります。

それは私自身にも起こっていることです。もっと経験があれば、もっと力があれば。そして神様に祈ります。もっと成長させてください。そうすれば、あなたの教会がもっと強くなれるでしょう。そう言わんばかりに。

しかし、神様はこの御言葉に繰り返し連れ戻されました。「私の恵みはあなたに対して十分である。」神様の恵みはとは何でしょうか。健康で、経済的にも、才能にも恵まれて、なんの妨げもなくバリバリ働けることでしょうか。そうではないでしょう。私たちの弱さも、醜さも、罪のどん底までも知り尽くし、それをご自分のものとして死に、復活までして下さった、あのイエス様のものにしていただいている、そのお方が働いてくださるための器となっている、ということでしょう。

「主が今日、あなたがたのためになされる救いを見なさい。・・・主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい。」

(出エジプト記14章13、14節)目の前には海が広がっていて前に進むことができない。後ろを振り向くとエジプトの軍隊が迫ってきている。もう立ちすくむしかない。そんな時に語られた神様の言葉です。この時、モーセが神様の命令を聞いて、そのとおりにすると、目の前の海が真っ二つに分かれ、新しい道が現れました。イスラエルは、神様のわざを見て、神様が開いてくださった道を進んでいきました。

私達は、主なる神様の戦いに、自分の背負っている弱さを委ねてよいのです。弱さや限界の前で、ただ立ち尽くす時、そこからようやく、教会らしい歩みがスタートするのかもしれない。主の前にひざまずくしかなくなる時、私達はまるで初めてのごとく、主にしっかりと結ばれている自分たち自身を発見するのかもしれない。そして、落ち着いた心で、主が今ここで、なしておられることを見る目が開かれ、主が歩かせてくださる道が見えてくるのかもしれない。

そしてまた、私達はもう1人ではないのです。兄弟姉妹方と一緒に、一つの体を形作るようにと呼び集められているからです。「むしろ、からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえって必要なものであり、・・・それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。」(コリント人への第一の手紙12章22～25節)

私達はまだ強すぎるのかもしれませんが。神様を差し置いて、兄弟姉妹からも離れて、自分1人で立とうとしているのかもしれませんが。神様や兄弟姉妹に素直に助けてほしい、と声を発するよりは、自分で強くなろうとし続けているのかもしれませんが。そうして、神様の恵みの力の働き場を奪ってきたのかもしれませんが、

2020年。私達を愛し、ご自身の恵みの力をあらかず器として下さった神様の選びの中で、自分自身を、互いを、弱い部分を含めて受け取り直したいと思います。弱さは、私達を結びつけ、イエス様の恵みの力を働かせるために与えられた、神様からの賜物です。「私の恵みはあなたに対して十分である。私の力は弱いところに完全にあらわれる。」

(記 本庄侑子)